

## 浅間山の火山活動解説資料

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ＞

浅間山では、山体浅部を震源とする火山性地震は、2025年7月頃から減少傾向が続いており、前1ヶ月間平均の日地震回数は、本年3月下旬から概ね30回で推移し、4月下旬からは30回を下回っています。山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動は、2024年5月以降停滞しています。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2025年6月頃から次第に減少し、同年12月頃からは2023年3月以前と同程度の少ない状態になっています。山頂火口からの噴煙量も少ない状態で推移しています。

火山活動は低下しており、山頂火口から500mを超える範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、本日（22日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

### 【防災上の警戒事項等】

山頂火口から500mの範囲に影響を及ぼす程度のごく小規模な噴火の可能性があるので、地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。突発的な火山灰噴出や火山ガス等に注意してください。

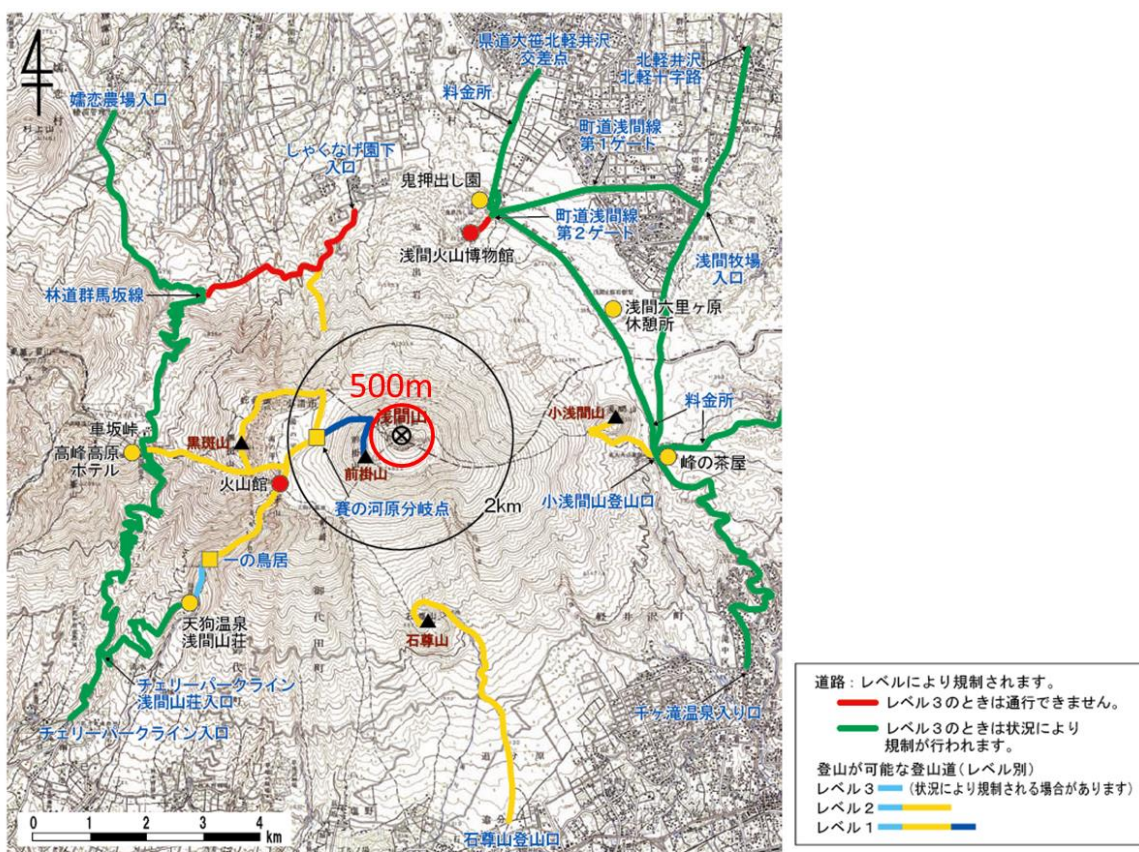


図1 浅間山 噴火警戒レベル1に対応した規制範囲（赤円内：火口から500mの範囲）

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、国土地理院、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています。

## ○活動概況

2023年3月15日頃から山体の西側での膨張を示すと考えられるわずかな傾斜変動が認められ、また、同21日以降、山体浅部を震源とする火山性地震が増加したことから、同23日15時30分に火口周辺警報（火口周辺規制）を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げました。

山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動は、2024年5月以降停滞しています。火山性地震は、2025年7月頃から減少傾向が続いており、前1ヶ月間平均の日地震回数は、本年3月下旬から概ね30回で推移し、4月下旬からは30回を下回っています。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年4月以降、多い状態でしたが、2025年6月頃から次第に減少し、同年12月頃からは2023年3月以前と同程度の少ない状態になっています。

以上のことから、火山活動は低下していると考えられます。



図2-1 浅間山 山頂部の噴煙の状況  
鬼押監視カメラ（5月5日）



図2-2 浅間山 山頂部の噴煙の状況  
追分監視カメラ（5月5日）

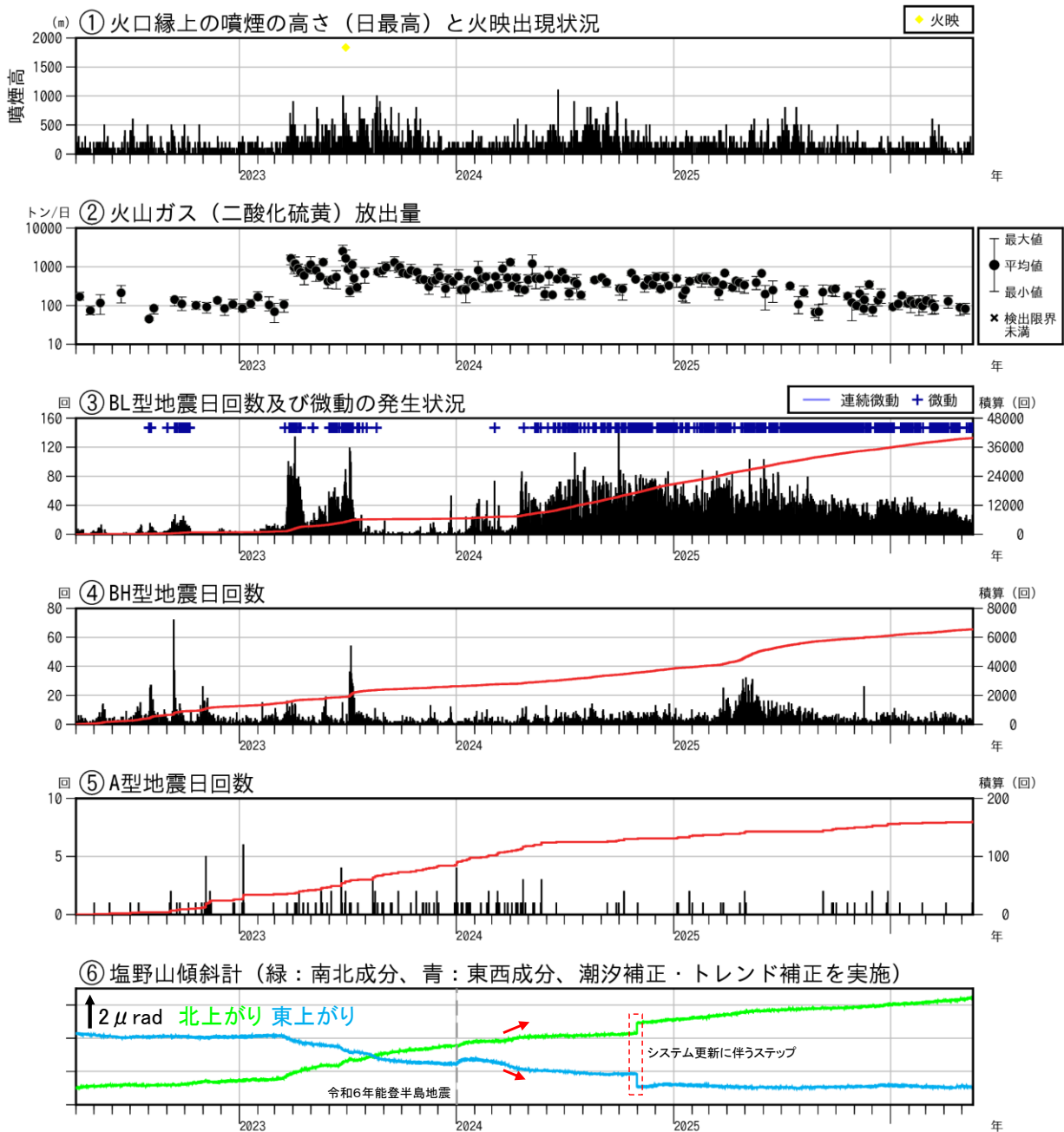


図3 浅間山 短期火山活動経過図（2022年4月1日～2026年5月19日）

- ・山頂火口からの噴煙は白色で、2026年4月以降、噴煙の高さは火口縁上300m以下で経過しています(①)。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年4月以降、多い状態でしたが、2025年6月頃から次第に減少し、同年12月頃からは2023年3月以前と同程度の少ない状態になっています。(②)。
- ・山体浅部を震源とする火山性地震は、2024年4月中旬以降増加した状態が続いていましたが、2025年7月頃から減少傾向が続いており、前1ヶ月間平均の日地震回数は、本年3月下旬から概ね30回で推移し、4月下旬からは30回を下回っています(③④⑤)。
- ・2024年3月中旬から同年5月まで、山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動がみられました(⑥赤矢印)。同年5月以降停滞しています。

⑥の赤破線内の変化はシステム更新に伴うステップです。

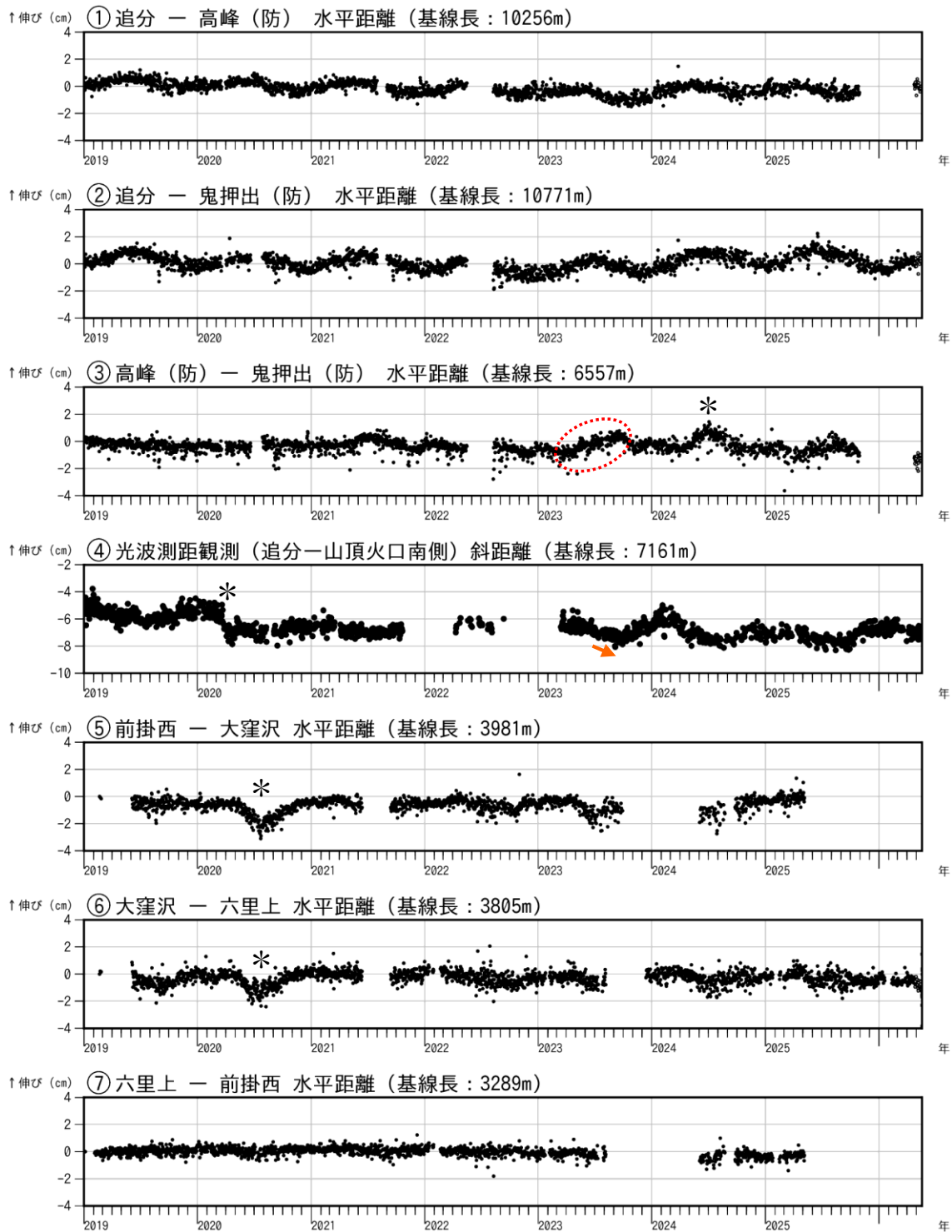


図4 浅間山 GNSS 連続観測及び光波測距観測結果 (2019年1月1日～2026年5月19日)

(防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所

- ①～⑦は図5の①～⑦にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。
- ①② 追分観測点は、2016年12月に移設しており、その後、基線長に年周変化がみられています。
- ③④ \*の変動の原因は不明ですが、火山活動によるものではないと考えられます。
- ⑤⑥ \*の変動は大窪沢観測点の固有の変動であり、火山活動によるものではないと考えられます。

- ・GNSS 連続観測では、現在、火山活動によると推定される伸びは認められていません。
- ・過去には、山体の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました (③赤破線)。これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示すと考えられています。
- ・光波測距観測では、過去には山頂と追分の間でわずかな縮みの傾向がみられました (④橙矢印)。これは、山頂部のごく浅いところの膨張によるものである可能性があります。

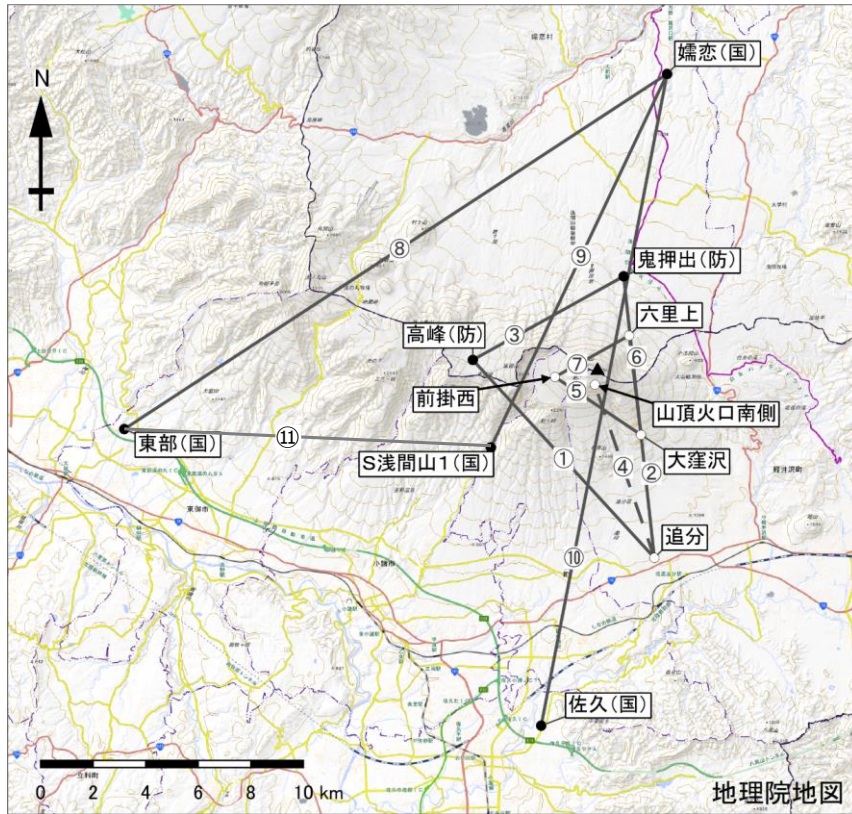


図5 浅間山 地殻変動連続観測点配置図

(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所、(国)：国土地理院  
GNSS 基線①～③及び⑤～⑦は図4の①～③及び⑤～⑦にそれぞれ対応しています。光波測距測線④は図4の④に対応しています。

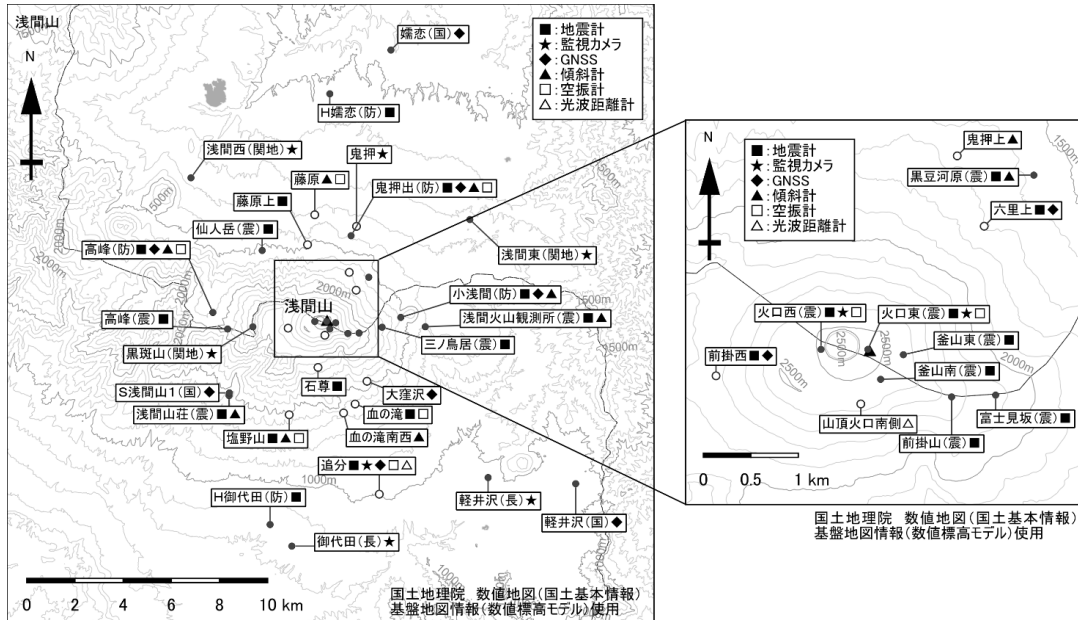


図6 浅間山 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所、(震)：東京大学地震研究所、(関地)：関東地方整備局、(長)：長野県